

## 『一刀斎先生剣法書』訳注及びスポーツ教育的視点からの考察 (2)

竹 田 隆 一  
教育学部 生涯スポーツ講座  
長 尾 直 茂  
教育学部 国語教育講座  
(平成15年10月1日受理)

### 承 前

研究の目的・意図等については前稿『山形大学紀要(教育科学)』第13巻・第2号所収。pp145 - 162。2003年2月刊)の冒頭に記したので、ここに贅言を重ねることはしない。ただし、凡例のみは便宜上、今一度載せることとした。今回の考察は第6章から10章までの5章である。

### 凡 例

訳注の底本には、今村嘉雄『日本武道大系』第二巻・剣術(2頁同朋舎, 1982)に収録された、京都鈴鹿家所蔵本『一刀斎先生剣法書』を用いた。但し、句読点は適宜に改めた箇所がある。また、参考資料として杉浦正森『唯心一刀流太刀之巻』を用いたが、これも『日本武道大系』第二巻所収のテキストに拠る。ちなみに『一刀斎先生剣法書』は寛文四年(1664)に、『唯心一刀流太刀之巻』は天明三年(1783)に稿成ったものである。

本書は16章から成るが、これを適宜に段落に分ち、そこに語注、現代語訳、そして必要に応じて補説を加えた。

語注は長尾が担当し、補説は竹田が担当した。現代語訳は両者で検討、吟味した上、ここに掲出した。なお、抄訳ではあるが、本書の現代語訳を試みたものに、吉田豊『武道秘伝書』(徳間書店, 1968)があり、適宜に参照した。

### 第 6 章

(1)  
ことわり わざ たち  
理は事よりも先に立、躰<sup>1)</sup>は剣<sup>2)</sup>よりも先んずる、是れ術の病気也。他に向て其事理を求むるが故也。臨機応変の事は、思量を以て転化するには非ず。自然の理を以て、<sup>おもはず</sup>不思とも変じ、<sup>はからず</sup>不量とも応ずる者也。故に我に<sup>かの</sup>応ずる彼一理<sup>3)</sup>を敬して、<sup>はっせず</sup>思慮分別を不発、一心不

乱に勝利を不疑<sup>うたがはず</sup>、能く本分の正位<sup>せいい</sup>に認得すべし。此法を学ぶ者、一心の修行如此なり。

### 【語注】

- 1) 躰...ここでは、身体、もしくは身体能力の意と解する。後出(3)節の割注では、「体は気に依て動き、気は心の向所にしたがふ。故に心変ずれば気変じ、気変ずれば体へんず」と説明する。なお、唯心一刀流では「剣前体後」「剣体和合」を重視する。『唯心一刀流太刀之巻』「剣前体後之事」では、「体あれば剣あり、剣あれば術あり。或は剣を専にして体を忘れ、或は体を専にして剣を忘るるあり。夫体は、剣より先立ときは、剣何を以てか人を害せんや。大將軍、諸勢より以前に出て討死する如し。将なきときは士卒、何を以て利すべきや。故に剣前体後の利を弁<sup>わか</sup>へ知るべし(p288)」という。体を大將軍に、剣をその軍勢に喩え、体が剣に優先することを大將軍が軍勢より前に出て討ち死にしてしまうようなものであると説き、剣が体に優先することを主張する。また「剣躰和合」については、同じく『唯心一刀流太刀之巻』に「よき所作は、剣と体と思ひ合たる様に外よりも見ゆる者也。剣躰和合して肉身の如にして、血脉運動する如きの心持也。又足の指より太刀先まで血氣行はれたる如く成ほどに、剣体、釣合、心持面白し(p291)」とある。剣と体とが自己の肉体の内でも和合し、その和合による心機<sup>こころ</sup>の充実が血流によって足の指から太刀までゆきわたるような状態は、第1章で説かれた「剣心不異」の状態を解説するものといえよう。
- 2) 剣...ここでは、剣を操作するための技術、もしくはその働きの意と解する。前項、『唯心一刀流太刀之巻』「剣前体後之事」において、「体あれば剣あり、剣あれば術あり(同前)」といい、身体能力と剣、剣と術とが密接な関係にあることを説く。これは身体能力なくして剣は成り立たぬこと、術なくして剣は成り立たぬことを説くものとも解することができる。ちなみに、吉田豊『武道秘伝書』では「剣」を、「剣の働き」と解している(p121)。
- 3) 彼一理...吉田豊『武道秘伝書』に用いるテキストは、「我に応ずる所の理」に作り(p120)、吉田は「自分自身のうちに備わるこの働き」と解釈する。
- 4) 本分の正位...「本分」は、自己が本来あるべきところ。「正位」は、正当な位置。よって、ここでは自己が本来あるべき正しい位置と解する。

### 【現代語訳】

道理を技よりも優先させ、身体能力を剣の操作術よりも優先させること、これは剣術における病気のようなものである。(ここで道理を技よりも優先させ、身体能力を剣の操作術よりも優先させることを病気というのは)他の点(=剣術の本質から離れた点)において技や道理を追求するようになるからである。(相手に向かって)臨機応変に技をくりだすことは、思慮や予想をもって(相手に対して)変化しているわけではない。自然の道理をもって、考えずとも変化し、予想せずとも応戦するものである。だから自己に挑戦してくる相手の道理をも尊重しつつ、思慮分別を起こさず、一心不乱に勝利を疑わず、(こうした心境を)十分に自己が本来あるべき正しい位置として認識すべきである。この唯心一刀流を学ばんとする者の、心の修行はこのようなものである。

## 【補説】

この部分の解釈であるが、湯浅晃は『武道伝書を読む』（日本武道館，2001）の中で、「理即ち心がわざ（事）より、また体が剣より先に発現すること、これは剣術にとっては病気であるといっています。なぜならそれは、勝つための手段を相手にもとめるからだといえます。「相手に勝ちたい」、「こうして勝ちたい」という意識が作為的に働き、そしてその意識が表面に現れることを戒めています。（p115）としている。しかし、ここでは「理」を「心」と解釈せず、道理ととるべきである。そして、「他に向かひて」は、相手に向かうのではなく、剣術の本質以外の他のものに向かうと解釈されるべきであろう。

金子明友が、『わざの伝承』（明和出版，2002）の中で、「伝承するに値するようなわざが初めて成立するときには、才能に恵まれた人がたえざる工夫とたゆまざる修練を経て、私の運動感覚能力を動員して、カンをとらえ、コツをつかみ、ついにわざとして結晶化させているのだ。そこに、いわば個人的な私の所産として、私の運動のかたちが立ち現れる。（p40）と示すように、わざは、運動の実践によって、個人的な所産として形成されるものであり、道理を優先させて形成されるものではない。

道理をわざより優先させてはならないという指摘は、マイネルの『スポーツ運動学』（金子明友訳，大修館書店，1981）の中にも見られる。「たしかに現在使われている走り高跳び技術のなかには、力学の立場からもっと合目的な技術が存在するであろうし、他のすべての諸要因をまったく考えに入れなければ、その技術で最高の記録が得られるかもしれない。しかし、力学的にもっとも目的的な解決の仕方がただちにその個人にもっとも目的的な解決の仕方になるものではない！選手の個人的な能力、とくに必要な筋力やスピードをきわめて適切なやり方ですべての動きに協調させる能力が、同時に力学的にもっとも目的的な解決の仕方と一致するなら、その選手は高い記録を出すことができるであろう。（p264）

身体能力を剣の操作より優先することについて、マイネルは、『スポーツ運動学』の中で、「スポーツ技術はスポーツの大きな達成をねらって、合理的な、すなわち合目的な、経済的な仕方と解される。実践の場で発達し、検証され、現在のところ周知のスポーツ技術は、一般的拘束性も個人条件としての特性も内包しているから、一般的拘束性だけをもつとはいえない。技術の個人的変形は模倣されてはいけない。（p268）と示している。個人の体格や運動能力が尊重されてわざを形成するものではないということである。

## （２）

高上に至ては、一心不乱と云沙汰いふさたもなく、一理敬する差別もなく、内外打成一片<sup>だじやう</sup>にして、善もなく悪もなし。千刀万剣を唯一つ心に具足<sup>こぞ</sup>し、十方に通貫して転変自在なり。是一心の修行を以て伝授を離れ、別伝の位に至る所也。

## 【語注】

1) 打成一片...一つにする。『碧巖録』第6則に「長短好悪を打成一片にす」とある。

2) 具足...欠くことなく十分に備えていること。具備満足に同じ。

## 【現代語訳】

高い位に至ると、一心不乱ということもなく、(相手の)道理を尊重するという(自他の)区別もなく、自他が一体となって、善もなく悪もない(状態である)。千刀万剣(あらゆる剣)を唯一つの自己の心にそなえ持ち、あらゆる方面に通じて変幻自在である。この状態は心の修行であっても伝授からは離れたものであり、別伝の位ともいべきものである。

(3)  
わざ 事にて理を先立てざる習と云は、水月<sup>1)</sup>を守りて能く邪気を不生(生ぜざれば)、千変は其一より転ず。一は無形の全体<sup>2)</sup>なり。たどへ 譬ば水の如し。水に常の形なし、故に能く方円の器に随ふ<sup>3)</sup>。而して躰を先立ざる習は、剣前体後の伝授也。此術は、其刃を以て利を成すの法也。故に剣あれば事あり、事あれば理あり。心は事の本也、体は剣の元也

体は氣に依て動き、氣は心の向所にしたがふ。  
 故に心変ずれば氣変じ、氣変ずれば体へんず。

## 【語注】

- 1) 水月...第5章を参照のこと。
- 2) 無形の全体...「無形」とは、千変万化して一つに固定しない状態をいう。こうした状態ゆえに決まった形がない、いわゆる「無形」の状態となる。「全体」は、全体を構成する本質と解釈する。
- 3) 方円の器に随ふ...定まった形がないゆえに、水は四角い容器に入れれば四角くなり、丸い容器に入れれば丸くなるという意。ここでは相手や場合に応じて、臨機応変に対応すべきことの比喩に用いる。もともとは社会が為政者に左右されることの比喩であり、例えば『韓非子』外儲説・左上には「孔子曰く、人君た為る者は猶ほ孟な孟はちのごときなり。民は猶ほ水のごときなり。孟方ならば水方に、孟圓ならば水圓なり」と用いられている。

## 【現代語訳】

技より道理を優先させないことを習うには、水月の伝授を守り十分に邪気を起こさぬようにすれば、様々の変化はその一点より起こるものである。その一点は無形であることを全体の本質とする。喩えれば水のようなものである。水には決まった形というものがない、だから四角や丸の容器の形に応じて(て形を変え)ることができるのである。そして身体能力を(剣の操作術よりも)優先させないことを学習するには、剣前体後の伝授がある。(そもそも)この剣術というものは、刃でもって勝利を得ようとする法である。よって剣があれば技があり、技があれば道理がある。心は技のおもとであり、身体能力は剣の操作術のおもとである。(身体は内なる氣に応じて動き、氣は心の向かう所に応ずる。だから心が変化すれば氣も変化し、氣が変化すれば身体も変化する。)

## 【補説】

ここでは、一貫して、剣前体後の重要性を説いている。前述のとおり、身体能力を重視し、剣の操作を軽視することは、道理に則した技を遂行することはできないということである。この点については、マイネルが、『スポーツ運動学』の中で、「どんなスポーツ技術におい

ても、遂行上の二次的な特徴（変形）が現れる。その特徴は選手の身長、筋力、体質や四肢のプロポーシオン、体重によって、また、神経系の類型（気質）によって、協調の能力や反応スピードなどによって、個人的に条件づけられている。これらの個人に条件づけられた運動遂行上の特徴は、決して一般妥当性を要求できるものでもなく、したがって一般的に拘束する力をもつものではない。（p263）と示していることから窺える。

（４）  
 その本裏に有て末表に有るを實と云ふは、是順<sup>1)</sup>也。末裏に有て本表にあるを虚と云、是逆也。實は必勝の位、虚は位不定の勝也。利<sup>2)</sup>、事より先んずる時、事何を以てか変に応ぜん。体、剣よりも先んずる時、剣何としてか人を害せん。故に能く其本を正して、而して其末を治むべきものなり。剣体本末を正に至る<sup>3)</sup>事は、事理修行の功にあり。

#### 【語注】

- 1) 順...本と末が本来あるべき通りの状態であること。「本末相順（本末相<sup>したが</sup>順<sup>いふ</sup>ふ）」ともいい、「本末転倒」の逆の状態。「本」と「末」の解釈については、『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝中の「応有本末之事（<sup>まさ</sup>応に本末有るべきの事）（p289）が参考となる。本は内也。心也。理也。末は外也。形也。事也。或は細に云ふ時は、事の上にてても手もとの所作、手さきの所作等の品々あり。本を以て来るときは、本を制し、末を以て来るときは、末を制す。是応ずる事、本末によりて時の<sup>よろし</sup>宜きに随ふ也。然りと云ども本を以て来るに末を以て制し、末を以て来るとき本を以て制する事もあるべし。是又時に応じ、節に制する事理なり。
- 以上から考えるに、「本」は身体の内側にある心の働き、あるいは道理と解釈すべきであり、「末」は外側にあらわれた形、あるいは技、所作と解釈すべきであろう。
- 2) 利...これを文脈上、「理」の意と解した。
- 3) 剣体本末を正に至る...これも文脈上、「剣体本末の正に至る」の意と解した。吉田豊『武道秘伝書』に用いるテキストは「剣体本来の正きに至る」とする（p121）。

#### 【現代語訳】

本（＝心、道理）が裏にあって末（＝形、技）が表にある状態を實というが、これは順（の状態）である。末が裏にあって本が表にある状態を虚といい、これは逆（の状態）である。實（の状態）は必ず勝利をおさめる位であり、虚（の状態）は位が定まっていない（偶然的）勝利である。道理を技よりも優先する時、技で、どうやって（相手の）変化に応ずることができよう。身体能力を剣の操作術よりも優先する時、剣で、どうやって人を殺すことができよう。よって充分に本を正して、そして末を修得すべきものである。剣体（の先後）本末（の表裏）の正しい理念を知るまでに至ることは、技と道理の修行の効果いかにかかっている。

## 第 7 章

わざ  
 事の外にあらはるゝ者は、外に<sup>1)</sup>応じて其内を利し、<sup>わざ</sup>事を内にもつ者は、内に<sup>2)</sup>随て其外を

勝べし。内外の縁に因て、其好む所に<sup>にく</sup>応じ、其悪む所に随ふ。其虚実を能く見て、本を攻めて末を勝、或は末を攻めて本を勝ち、或は本末<sup>3)</sup>ともに攻て本末ともに勝つ。故に事を以て是を攻る時は、利<sup>4)</sup>是を守り、利を以て是を攻る時は、事是を守る。内外専ら攻る時は、<sup>あやまち</sup>過表に有。内外全く守る時は、過裏にあり。攻る時は是れ守る所あるが故也。守るも亦攻る利有るが故也。故に攻るも攻るにあらず。攻ざれば勝利を得ず。守るも守るにあらず。守らざれば勝利なし。是を<sup>いふ</sup>残不残の伝授<sup>5)</sup>と云。皆事之雖為行(皆な事の行たりと雖も)、本を能く正さずんば、末何ぞよろしからん。本末ともに能く正しき者は、千変自由にして万化心に不<sup>いそど</sup>求(求めず)とも、節に当て自ら変化宜し。

### 【語注】

- 1) 応じて...適応する。
- 2) 随て...随順する意と解し、1の「応じて」と同意と解釈する。
- 3) 本末...第6章(4)の【語注】の1で触れた通り、「本」は自己の内側にある心、あるいは心の働きと解し、「末」は自己の外側にあらわれた形、技と解する。
- 4) 利...文脈上、この一文の「利」は全て「理」の意と解した。「理」は道理というよりは、ここでは、心の働き、もしくは心と解釈した。
- 5) 残不残の伝授...内外、事理、攻守との関係は下表のようになろう。

内	外	結果	位
理で守る	事で攻める	勝利	残
理で攻める	事で守る	勝利	残
理で攻める	事で攻める	敗北は表面化する	不残
理で守る	事で守る	敗北は内面化する	不残

### 【現代語訳】

技が外部にあらわれている者は、その外部(の技)に適応してその内側にうまく作用させ、技を内部にもつ者は、その内部(の技)に適応してその外部にうまく作用させるべきである。内外の関係によって、その得意な所に適応し、その不得意な所に適応する。その虚実を充分に見極めて、(相手の)本(=心)を攻めて末(=技)において勝ち、あるいは(相手の)末を攻めて本において勝ち、あるいは本末ともに攻て本末どちらにおいても勝つ。よって技で相手を攻める時は、道理(=心)で自己を守り、道理で相手を攻める時は、技で自己を守るのである。内外どちらにおいても攻める時、失敗は表面に生ずる。内外どちらからも守る時、失敗は内面に生ずる。攻る時(ということが生ずるの)は、守る所があるからなのだ。守る(ということが生ずるの)もまた攻める道理(=心)があるからなのだ。よって攻めることも、ただ攻めるのではない。(守る所があつて必然的に)攻めるのでなければ勝利を得ることはないのである。守ることも、ただ守るのではない。(攻める所があつて必然的に)守るのでなければ勝利はないのである。これを残不残の伝授というのである。こうしたこと全ては技における修行ではあるが、本(=心)を充分に正さなければ、末(=技)がどうしてよいことがあるだろうか。本末どちらも充分に正しい者は、どんな変化に対しても自由であり、あらゆる変化(に対応すること)を心の中で求めなくても、それ

その場合に依じて自然と変化がうまくゆくのである。

### 【補説】

「本を能く正さずんば、未何ぞよろしからん。」と述べる一方で「利、事より先<sup>わざ</sup>ずる時、事何を以てか変に<sup>わざ</sup>応ぜん。」と述べている。「理」と「事」の両方重要であるが、とくに事(技)であるということなのであろうが、このような難渋な表現がこの伝書の特徴であり、解釈を困難なものとしている。

## 第 8 章

### (1)

事<sup>わざ</sup>に利<sup>り</sup>を持<sup>もつ</sup>を先<sup>せん</sup>を守ると云。利に事を持<sup>もつ</sup>を後<sup>ご</sup>を守ると云。先に止まる時は後に利なく、後に止る時は先に利なし。事理先後に不止(止らざる)を術の要害<sup>とどま</sup>とす。故に先後は敵にあり、我是を守るにあらず。先後一事の伝授<sup>いでん</sup>と云者、全く先に不有(有らず)、後にあらず。先なる時は後<sup>ご</sup>も是に兼ね。又後なる時は先是に備る。強弱軽重<sup>もろもろ</sup>、諸の所作<sup>いづ</sup>、何れも同じ。

### 【語注】

- 1) 利...前章と同じく、「理」の意と解する。
- 2) 要害...本来、人体の急所をいうが、ここでは「大切なポイント」の意。
- 3) 先後一事の伝授...「先」と「後」とが一つ事であるという教え。『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝中の「先後不止之事」が同様のことをいう(p287)。
 

先にも後にも止らざる也。先後は敵にあり。我是を求るに非ず。全<sup>まったく</sup>先にあらず、後にあらず。先なるときは後にも是に兼、後なるときは先是に具る。一にして而も二也。二にして而も一也。

「先後」に関しては、後出の第9,10章に詳しい。それぞれの意味はとりあえず、現在の剣道において用いられる意味と同様に、「先」は、相手の先手を取る意、「後」は後手に回って受けてたつ意と解釈した。

### 【現代語訳】

技に道理が備わる状態を「先」を守るといふ。道理に技が備わる状態を「後」を守るといふ。「先」ばかりに止まっている時は「後」にうまく働かず、「後」にばかり止っている時は「先」にうまく働かない。事理、先後(の、どちらか一方)に止らない状態を、剣術では要点とする。だから先手を取るか、後手に回って受けてたつかは敵側(の問題)であって、自分からこのどちらかを選ぶものではない。先後一事の伝授<sup>いでん</sup>というは、ひたすら先手を取るというのでもなく、ひたすら後手に回って受けてたつというのでもない。先手を取った時には後手に回って受けてたつことも内に兼ね、また後手に回って受けてたつ時は先手を取ることも内に備えているのである。強弱や軽重など、他のいろいろな動作に関しても、どれも同じことがいえる。

## 【補説】

現在の剣道指導書では、技を仕掛け技と応じ技と大きく分類している。仕掛け技が「先」であり、応じ技が「後」ととらえられる。さらに、「先後一事の伝授」は、現代剣道でいわれる「懸待一致」、「攻防一致」と同意である。「先（懸、攻）の中にもいつ相手が打ってきてても対応できる「後（待、防）の備えが必要であるし、「後（待、防）であっても、常に「先（懸、攻）の気持ちで相手を圧倒し、相手に自由に技をださせないようにしなければ、技は成就しないのである。

## (2)

其事一にして二也、二つにして又一つなり。天にあるかと思れば、忽ち地に発し、地に発するかと思れば、端的天に在り。静なる事山の如く、動き至ては電光石火も及びがたし<sup>1)</sup>。是<sup>これ</sup>一心先後に不止（止らざる）が故に、一理万事に通じ<sup>せん</sup>應ずるもの也。雖然<sup>しか</sup>（然りと雖も）、事<sup>わざ</sup>は自己の心身に能く得たる所ある者也。故に先の事を得たる者は専ら先を守り<sup>せん</sup>利を得、後の事を得たる者は専ら後を用いて利を得る者也。強弱軽重の所作、何れも然也。

## 【語注】

1) 静なる事山の如く…武田信玄が軍旗に書いたことで有名な『孫子』軍争篇の「風林火山」の一節に因む。『孫子』の文章には、「動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くこと雷霆（いなずま）の如し」とある。なお「電光石火」は、いなずまの光と石を打って出る火花とをいい、動作・行動の迅速なことを喩える。

## 【現代語訳】

（先手、後手という）事は一つであって二つであり、二つであってまた一つである。天にあるかと思えば、たちまちのうちに地から発し、地に発するかと思えば、まさしく天にある。静かであることは山のようにであり、動く段になると電光石火も追いつかぬほど素早いのである。これは心が「先」「後」に止らないために、万事に道理が通じていて（敵に）応ずることができるからである。そうはいつでも、技は自己の心身に深く修得した得意な所があるものである。だから「先」の技を得意とする者はひたすら「先」を守って利点を得、「後」の技を得意とする者はひたすら「後」によって利点を得るのである。強弱や軽重の動作については、どれも同じことがいえる。

## 【補説】

「先」と「後」のどちらかに偏ってはならずといいながら、「先」の得意な者は、「先」を尊重し、「後」の得意な者は、「後」を尊重するようにと説いている。この伝書の特徴をここに読み取ることができる。それは、理想的な剣術の技は、「先」あるいは「後」と固定されるものではないという主張である。また、「先」か「後」いずれかの得意を伸ばせば、見かけ上偏っているとは思えても、そこから「理」を得ることができるということであろう。この点について、マイネルの『スポーツ運動学』では、「レスター・ステアスあるいはユリー・イリヤソフのような比較的上背のない選手は振り上げ脚を必要なスピードでさばくことができるので、かなり伸ばして振り上げているのである。これに対して、2

m04の上背をもつワルター・ダビス(記録2 m12)にとっては、約20~25cmも長いその脚の振り上げは、膝を少し曲げたほうが必要なスピードを得られるのである。(p263)と示されており、この場合「先」「後」に関わる記述ではないが、人それぞれの適性に合わせた技術を使うべきだと指摘している。

(3)  
 理<sup>ことわり</sup>を以て観之(之を観れ)ば、偏<sup>ひとへ</sup>たりと云ども、其事<sup>そのわざ</sup>能く身心に得る者は、外に求める利<sup>り</sup>なし。他に向て是を不求(求めざれ)ば、一心、其所作に転ぜず。是則ち先後不止の道理に叶ふ者也。能く術に達する者は、先に止りても先に奪<sup>とら</sup>はれず、後を守りても後にとられず、事を守りても心其事に染らず、理<sup>ちやく</sup>に著<sup>ちやく</sup>しても事利<sup>とら</sup>に取れず、形有かと欲すれば全く形無く、形なきかと思れば正に形あり。是を邪正一如の位<sup>ゐ</sup>と云也。

#### 【語注】

- 1) 利...ここも前章と同様に、「理」の意と解する。
- 2) 邪正一如の位...正しくないこと(=邪)と正しいこと(=正)が一つになること。本節の内容からすれば、「先に止り」「後を守り」「事を守り」「理に著して」というような状態は「偏」であって、正しくない状態といえる。しかし術の達者ともなると、「先」に止っても「先」に(心を)奪われることはなく、「後」を守っても「後」に(心を)とられることもない。技をしっかりと守ってはいても心はその技に染らず、道理に執着してはいても事理にとられることはない。これが邪正一如の位ということになる。

#### 【現代語訳】

(事理という)道理でもって考えるならば、偏りといえるが、技を十分に心身に修得する者は、外に道理を求める必要はない。外にこれ(=道理)を求めないのであれば、心をその動作に転化する必要もない。この場合は先後不止の道理にかなっているのである。十分に剣術に達した者は、「先」に止っても「先」に(心を)奪われることはなく、「後」を守っても「後」に(心を)とられることもない。技をしっかりと守ってはいても心はその技に染らず、道理に執着してはいても事理にとられることはない。形が有るかと思えば全く形は無く、形が無いかと思えば正に形がある。これを邪正一如の位というのである。

(4)  
 理を離れて勝つを、術の達者と云也。蓋し究竟窮極、不存軌則<sup>これ</sup>と云。是を心に得、是を手に応ずるものは、心は心、事は事、我は我、敵は敵、何に向て何をか求め何をか捨ん。一事の秘伝<sup>しひでん</sup>と云も、一事の位に至るべき道なり。至ては、誰か其道を守らん。もし守て是を学ぶ者は、未至(未だ至らざる)が故也。雖然未至(然りと雖も未だ至らざる)者は、不学(学ばざれ)ば不能至事(事に至る能はず)。故に一事の秘伝を以て、先後不止の道理を示す者なり。

#### 【語注】

- 1) 究竟窮極、不存軌則...「究竟窮極」は、仏教にいう、究極の境地の意。ちなみに究極

の悟りを「究竟覺」、その悟りに達した位を「究竟位」という。なお、この一句は禅宗において尊重される書、三祖僧璨『信心銘』を出典とする。

- 2) 一事の秘伝...「先」と「後」とが二つであって一つであるというように、二つの要素が二つでありながらも一つであるという教え。

### 【現代語訳】

道理から離れて勝つ者を、術の達人というのである。おそらく、(『信心銘』が)究極の境地は規則にあるのではないという(のが、これであろう)。こうしたことを心に理解し、こうしたことを術に 응용するものは、心は心と、技は技と、自己は自己と、敵は敵と(認識しているので)、何に向かって何を求め、何を捨るといのか(いや何も求めず、捨てもしない)。一事の秘伝というものがあるが、これは一事の位に至るための道である。(一事の位に)到達すれば、誰が(到達するための)道を守るであろうか(いや守りはしない)もし(到達するための道)を守り学ぶ者がいたとすれば、(その者は)まだ(一事の位に)到達していないためである。そうはいいながらも一事の位に到達しない者は、学ぼうとしないので一事の位に到達することができないのである。だから一事の秘伝でもって、先後不止の道理を示すのである。

## 第 9 章

先に体・用<sup>1)</sup>の二つ有り<sup>兼に養ふるを体といひ、心に用ふるを用といふ。</sup>。其備<sup>そのそなへ</sup>不変にして無事を以て攻むるを体の先と云、既に其位<sup>したがり</sup>変じて処<sup>ところ</sup>に隨て形を現ずるを用<sup>いふ</sup>の先と云。伝に曰、体の先は体を以て攻め用を以て守る<sup>これ</sup>。是敵の利<sup>うばひ</sup>を奪て其備を破り、合するを以て攻む。其利を表とし其事<sup>わざ</sup>を裏とする也。用の先は、用を以て攻め体を以て守る<sup>これ</sup>。是敵の備を破て其事を奪ひ、離するを以て攻む。其事を表とし其利<sup>のべ</sup>を裏とする也。若し体用攻守の事理を知らず、妄りに乗じて勝たん<sup>のべ</sup>と欲する者は、首を延て討れ、手を出して斬らるゝに同じ。能く鍛錬すべし。

### 【語注】

- 1) 体・用...割注にある通り、技にあらわすことを「体」、心をめぐらすことを「用」と理解する。ただし、一般に用いられる「体」は本体・実体の意であり、「用」は作用・働きの意とする。禅林では「用」を「ゆう」と読みならわし、大機大用(並はずれた作用)なる成語も知られる。こうした禅林の体・用の概念を持ち込んだ柳生新影流は、その伝書『兵法家伝書』(渡辺一郎注：日本思想体系61 近世藝道論 岩波書店、1972、p337)活人剣下において、以下のように説明する。

大機大用。用を用とよむべし。物の躰用の時、用とよむべし。物ごとに躰用と云事あり。躰があれば、用がある物也。たとへば、弓は躰也、ひくぞ、いるぞ、あたるぞと云は弓の用也。燈は躰也、ひかりは用也。水は躰也、うるほひは水の用也。梅は躰也、香ぞ、色ぞと云は用也。刀は躰也、きる、つくは用也。

この説明に明らかな通り、新影流の体用論は禅の影響下に形成され、なおかつ一般的な体用の解釈である、本体と作用という理解を示すことが見て取れる。しかし、本書の体用論はこれとは大きく異なる。

2) 利...「事」と対応させていることから考えて、ここも前章と同様に「理」の意と解し得る。本章では「心」と訳しておく。

#### 【現代語訳】

先手をとるには「体」と「用」の二つがある(割注: 技にあらわすことを体といい、心をめぐらすことを用という)。自分の備えはそのまま変えず、作為なく攻めることを「体」の先といい、自分の位置を変えつつ状況によって形として現すことを「用」の先という。伝書にいう、「体」の先は「体」で攻め、「用」で守る。これは敵の心を奪って(こちらに利用し)、その守備を破り、相手と向き合う状態で攻めるのである。(この場合は、敵の)心を表とし(て攻め)、(自己の)技は裏とするのである。「用」の先は、「用」で攻め、「体」で守る。これは敵の守備を破り、その技を奪って(こちらに利用し)、相手と離れた状態で攻めるのである。(この場合は、敵の)技を表とし(て攻め)、(自己の)心は裏とするのである。もし体用、攻守の技と道理とを知らないで、むやみに攻めて勝ちたいと思う者は、自分から首を伸ばして討たれ、手を出して斬られるのと同じである。よく鍛錬すべきである。

## 第 10 章

(1)

後は、敵の体と用とを利する二つ也<sup>利は自然</sup>。敵、体を以て利せんと欲せば、其志す所に随て<sup>したがひ</sup>其用を可殺(殺す可し)。用を以て勝んと欲せば、其現ずる所に依じて其体を破るべし<sup>1)</sup>。来て残る者を末<sup>2)</sup>に依じ、不残者(残らざる者)を本に随ひ、本動じて末静なる者を其本を利し、本正しくして末乱るゝ者を残して是に依じ、本末俱に動ずる者は其過を殺し、本末共に静なる者は其誤り<sup>3)</sup>を利すべし。雖然(然りと雖も)其形<sup>4)</sup>に随て其色を追へば、奪るゝに利あり。事理、其先に奪るゝ時は後に利なし。

#### 【語注】

- 1) 敵、体を以て...吉田豊『武道秘伝書』に用いるテキストは、この一文が大きく異なる。すなわち「敵、体を以て利せんと欲せば、其現ずる所に依じて其体を破るべし(p125)」となっており、本稿の底本にある「其志す所に随て其用を可殺。用を以て勝んと欲せば」という文章を欠いている。
- 2) 末...後出の「本」と対になる概念である。第6章(4)の【語注】の1を参照。
- 3) 誤り...失敗、誤謬の意であるが、ここでは、本心、技ともに動揺しない完全な状態が何かのミスで、ほころんでしまうことをいうものと解した。
- 4) 形...後出の「色」と同義として用いられることが多いが、本書では区別して用いる。「形」は形あるもの、形態の意で、ここでは攻撃する形態、守備する形態などの意味を表し、「色」は形に現れる形相、表情の意で、ここでは攻撃の形態が示す動作、守備の形態が示す動作などの意を表すと解した。

## 【現代語訳】

後手に回って受けてたつには、相手の「体」と「用」とを自然の勢いとして利用する二つ方法がある（割注：利とは自然の勢いをいう）。相手が、「体」で優位に立とうとしていれば、その思う所に応じて（心の動きである、その相手の「用」を殺すべきである。（相手が「用」で勝とうとしていれば、その外に現れた所に応じて（目に見える技である、その相手の「体」を破るべきである。仕掛かって来て（余力を）残す者に対しては技で応じ、残さぬ者に対しては心で応じ、本心が動いていながら技が動かない者に対しては、その本心（の動揺）を利用し、本心が正しくありながら技が乱れる者に対しては、余力を残してこれ（＝技の乱れ）に応じ、本心、技のどちらも動揺する者はその欠点を殺し、本心、技のどちらも動揺せず静かな者に対しては、そのほころびが生じて来るのを待つて利用するほかない。そうはいつでも、相手が掛かって来る、その形態に応じ相手の動作ばかりを追いかけていれば、（相手に「先」を）奪われるという（相手の）有利となる。事理ともに、相手の「先」によって奪われる状況では「後」に有利な点はない。

## ( 2 )

故に我が伝の後は、其形に向て其色を殺す者也。向・殺の二つは、一体一用の事也。向を以て殺し、殺を以て向ふ者也。剣刀の発当の強弱、剣勢<sup>1)</sup>本末<sup>2)</sup>の備、劍躰前後の口伝<sup>3)</sup>、其得失は皆事の修行より剣心不異<sup>4)</sup>の全体に至て、臨機応変の事自在也。此理微妙にして伝て是に示しがたく、学んで是に至りがたし。実に以心伝心<sup>5)</sup>の妙理也。其寒温を自知する者<sup>6)</sup>は、先師一刀斎の骨髓に符節を合するが如し<sup>7)</sup>。

## 【語注】

- 1) 剣勢...第4章の威勢、及び『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝「劍躰備勢之事」(p288 - 289)を参照のこと。
- 2) 本末...第6章の、特に(4)の「劍体本末」を参照のこと。
- 3) 劍躰前後の口伝...第6章、参照のこと。
- 4) 剣心不異...第1章の(3)、及び第2章(3)の「構心に不異之位」を参照のこと。
- 5) 以心伝心...禅において重要視される概念で、言葉や経典などによらず、師匠の心からと弟子の心へと真理を伝えるという意。
- 6) 寒温を自知する...寒い季節から暑い季節へと移り変わる、その自然の理を自得する者と解した。
- 7) 符節を合するが如し...割り符を合わせるかのように、二つのものがぴったりと合うこと。『孟子』離婁・下に「志を得て中国に行ふは、符節を合するが若し」とある。

## 【現代語訳】

だから我が流派の伝としての「後」は、相手の（攻撃の）形態に対してその動作を封じるというものである。相手に対する「向」、相手の動作を封ずる「殺」の二つは、前者が（技術関連の「体」）の技、後者が（精神的な面の「用」）の技なのである。相手に対して相手の動作を封じ、相手の動作を封じて相手に対するのである。太刀の抜きつけの強弱、斬りつけの強弱、剣勢・本末の備え、劍躰前後の口伝、それらの成功・失敗はすべて技の修行に

よるものであり、それが太刀の操作法と心とが一体となる剣心不異の教えという全きところに到達することで、臨機応変の技が自由自在に出ようになるのである。この道理は微妙なもので伝えてここに示すこともできず、学んでここに至ることもできない。実に以心伝心の妙理である。季節の寒温の道理を自得する者は、先師一刀齋の真髓にぴったりかなうものである。

#### 【補説】

現代剣道では、「先々の先」、「先」、「後の先」の三つの先がいわれる。本書の内容を、それに照らし合わせると、「体の先」は、「先々の先」、「用の先」は、「後の先」にあたる。また、「先」は伝書における「後」にあたると思われる。

### ま と め

前稿に引き続き、現代の剣道指導書の先行形態と考えられる『一刀齋先生剣法書』を現代語訳し、その技術に関する名辞の意味・内容をマイネルのスポーツ運動学の視点から考察し、以下のことが明らかになった。

1. 「理(道理)」を「事(技)」よりも優先させてはならず、「体(身体能力)」を「剣(剣の操作術)」よりも優先させてはならない。つまり理論、身体能力を極めて偏重することは剣法上、敗北につながるのである。
2. 「事」で攻め「理」で守る時と「事」で守り「理」で攻める時とは勝利し、この状態を「残」という。「事」理」ともに攻める時と「事」理」ともに守る時とは敗北し、この状態を「不残」という。つまり攻守のバランスが取れた状態を「残」といい、取れない状態を「不残」という。
3. 「先」と「後」とは二つでありながら一つである。また「先」後」は臨機応変なものであり、どちらか一方にとらわれてはいけない。また、「先」後」いづれを取るかは、相手の動きによって臨機応変に決めるものである。
4. 「先」後」に、それぞれ「体」用」の区別がある。

## Summary

**TAKEDA Ryuichi<sup>1)</sup>, NAGAO Naoshige<sup>2)</sup>:**

**Translation with notes of “Ittousai sensei kenpousyō(「一刀齋先生剣法書」)”  
and some considerations from the sport pedagogic viewpoint ( 2 )**

This report is the modern translation of “Ittousai sensei kenpousyō(「一刀齋先生剣法書」)” from chapter 6 to 10, which is regarded as the precedent form of modern Kendo instructions. The authors tried to give the realistic meanings and contents to the terms and technics in the document.

- 1 . “Kotowari(「理」)” should not be above “Waza(「事」)” and also “Tai(「体」)” should not be beyond “Ken(「剣」)”. Too much dependency of theory and corporal competence will bring defeat in the sword technic .
- 2 . The victory will come when we take offensive action with “Waza(「事」)”, and guard with “Kotowari(「理」)”, which we call “Zan(「残」)”. If we take offensive action with “Waza(「事」)” and “Kotowari(「理」)” simultaneously, we will be beaten. We definite it condition as “Fuzan(「不残」)”. On the contrary, “Zan(「残」)” means the situation of good balance and “Fuzan(「不残」)” with no balance.
- 3 . “Sen(「先」)” and “Go(「理」)” stand as separate ones, but both exist as a whole one. One of two factors is adapted to the situations. which one we should take properly depends on opponents’ movement.
- 4 . “Sen(「先」)” and “Go(「理」)” also has other discrimination of “Tai(「体」)” and “Yū(「用」)”.

1 ) Section of Lifelong Sports, Faculty of Education

2 ) Japanese, Faculty of Education